

飯樋町の牛舎と、小宮の牛舎に、合わせて約180頭の母牛と子牛がいます。佐藤隆男さんは、昨年から、村内の牛舎で畜産を再開し、9か月から10か月まで育てた子牛を、本宮市場に出荷しています。震災前から共に畜産を行っていた次男の豊洋さんも、自分の牛を買い付け、畜産家として独立しました。互いに協力をしながら、同じ牛舎で仕事をしています。「息子がいなかったら、できないよ。牛のお産は夜の仕事になるし、俺も体力的に大変になってきたからね」と隆男さん。「息子達が頼りになるんだ」。

豊洋さんにも、その思いは伝わっています。「自分の生き残る道として、やっていくことにした」。パトンを未来に引き継ぎたいと考えています。現在は牧草も栽培しています。検査で安全を確認して食べさせています。「一番草は、やわらかくて、よかったよ」と、隆男さんの妻のたつよさん。隆男さんの頑張りのおかげも「一番近くで支えてきました」。「(隆男さんは)寝ても覚めても仕事の話。本当に仕事が好きなんだなあ」と。そう笑うたつよさんの明るさが、家族のパワーの源かも知れません。

RESTART

畜産・酪農の復活へ

挑戦を支え合う

佐藤隆男さん (飯樋町)
佐藤豊洋さん



左から、佐藤豊洋さん、たつよさん、隆男さん。小宮の牛舎にて

大変な苦勞を越えて、たどり着いたそれぞれのRESTART。前を向く皆さんの素敵なお笑顔と、未来を目指す足跡に、勇気をもらいますね。畜産の村の新しい物語が再び動き出しています。



RESTART

畜産・酪農の復活へ

新しい牛舎で 山田豊さん (関根・松塚)

明るい牛舎で、引越して来たばかりの牛達が、のんびりと過ごしていました。村内に整備中の3棟の牛舎。完成した一部に、この7月、牛が入りました。山田豊さんの牛舎です。「分娩を迎える牛が多いので、少しずつ運ぶようになります」。震災後、妻のあゆみさん、幼い子ども達との避難が続く中で、豊さんは、京都市の精肉店に勤務しました。避難の中でも牛の仕事につながる「おいしい肉」を学ぶためでした。「避難当時は、村での再開は、ほぼ難しいと思っていました。けれど、親父が避難先で牛を飼い続けてくれたこと、加えて子牛が高値だったこともあって、再開することができました」と振り返ります。父親の猛史さんは、牛を連れて中島村に避難。いずれは故郷の田畑で放牧をしたいと、飯野町に借りた牛舎に移り、村へも準備に通信しました。「親父は明るくて、こういう生き方をしたい、こういう村にしたいというのをいつも持っている。自分もそうありたいと思っています」。新しい牛舎の建設については、「村のサポートがあつて選択肢が広がった」と話します。「村や地域に、何らかの形で返していきたい」。



山田猛史さん

猛史さんは実証が終わった牧野での放牧を継続中

村内には他にも借り受けた牛舎があり、飯野町の牛舎もあります。猛史さんをはじめ、家族と力を合わせる毎日です。「水や牧草の放射線量を測り、安全を確認しながら頭数を増やしていく計画です。まだ試験段階ですが、肥育の再開にも取り組んでいきます」。これまでの経験すべてを糧にして、豊さんの挑戦が続きます。